

子宮がん検診(神奈川方式)

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年日母設立20周年を記念して神奈川県産婦人科医会との協力事業としてスタートしたものである。県下の医会会員医療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について鏡検・判定を行い、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

前頁の車検診が行政主導で行われているのに対し、神奈川方式は産婦人科医会会員主導で行われており、両者相補って本県の子宮がん検診の骨格をなすものであるから益々の充実が望まれる。

20年度は、頸部検診において、検査数32,684件（前年比－751）、受診者数30,720名（前年比－638）ともに減少している。

精度管理については、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の情報処理部により行われ、県産婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

方 法

実施方法については昭和53年に日母（現日産婦医会）がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化（日母方式）答申を踏襲しつつ、平成18年度改正のがん検診実施のための指針に従っている。従って対象者は30歳から20歳以上に引き下げられ、問診、視診、内診を行うこと、コルポスコープ診を初回から細胞診と併せて使用することが奨められている。

体がん検診は頸がん検診受診者の内、問診の結果最近6ヶ月以内に不正出血、月経異常、褐色帯下のいずれかの症状を有していた者の中から希望者を対象に内膜細胞診を行っている。

子宮頸がん検診

平成20年度の子宮頸がん検診受診者は30,720名（前年度31,358名）で平成15年度26,504名を谷として年々増加が期待されたが、平成17年度に3万人台に達した以後プラトーとなり増加傾向はみられない。

若年者子宮頸がんの増加傾向に対応して平成18年度の指針改正から検診対象に組み入れられた20歳代も4,507名（前年度4,696名）で早くも固定化が心配される状態である。

今年度ががん確定者は65名、発見率0.21%（前年度59名、0.19）で微増した。内訳は頸がん60名、体がん2名、その他のがん3名であった。その他のがんの内訳は卵巣がんIIIc期、卵巣がんIc期再発、腔がん

病期不明である。

年齢階級別がん確定数は、29歳以下6名、30歳代24名、40歳代15名、50歳代7名、60歳代9名、70歳以上4名であった。50歳以上の高年齢層に体がん（2）、その他のがん（2）の発見数が多い傾向は変わらないが、進行期頸がんについても50歳以上8名、50歳以下6名で同様の傾向がみられた。

30歳代以下の若年層と40歳代以上の比較では、30歳代以下の受診者数12,914名（総数の42%、がん確定数30名（発見率0.23%）に対し、40歳代以上の受診者17,806名（総数の58%）、がん確定数35名（発見率0.20%）で発見率に差はなかった。

病期別的には、30歳代以下では発見された頸がん30名中、0期22名、Ia期4名、Ib期以上2名であって早期がんが多く、40歳以上では35名中、0期12名、Ia期3名、Ib期以上12名、腺がん2名で進行がんが多い傾向は変わらなかった。

頸部腺がんは増加が指摘されているにもかかわらず、今年度も4名のみで頸がん確定者中6.7%であった。

異形成については、確定者数229名、発見率0.75%（前年度182名、0.58%）であった。内訳は軽度異形成131名、中等度異形成57名、高度異形成41名、腺異形成0名で、軽度異形成中心に増加傾向に変わらなかった。

年齢階級別では、30歳代以下の確定者数が140名（発見率1.08%）、40歳以上が76名（発見率0.43%）であって、若年層の発見率が極めて高かった。

子宮体がん検診

平成19年度の体がん検診受診者は7,677名（前年度8,164名）、頸がん受診者数の25.0%（前年度26.0%）であった。

がん確定者は21名（発見率0.27%）。内訳は子宮体がん16名、体がん以外の悪性腫瘍として卵巣がん4名（卵巣境界悪性腫瘍Ic期1名、卵巣がんIIIc期2名、卵巣がん病期不詳1名）と、頸部腺がんIIb期が発見された。その他、前癌病変としての内膜増殖症が11名（発見率0.14%）、頸部異形成が2名発見された。

年齢階級別がん確定数は、40歳代2名、50歳代12名、60歳代4名、70歳代3名であった。増殖症の年齢分布は30歳代1名、40歳代5名、50歳代3名、60歳代2名、70歳以上0名であった。

病期別的には、0期（異型内膜増殖症）1名、I期の早期がん12名、II期以上の進行がん3名であった。

関係の集計表は94頁に掲載